

氏名(本籍)	たか はし かず ひろ 高 橋 和 裕
学位の種類	歯 学 博 士
学位記番号	歯 第 7 6 号
学位授与年月日	昭 和 6 1 年 7 月 2 日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
最終学歴	昭 和 5 3 年 3 月 東北歯科大学歯学部卒業
学位論文題目	顎関節機能障害の診断学的研究 第三報 顎頭位の定量的 X 線診断

(主査)

論文審査委員

教授 三 條 大 助

教授 手 島 貞 一

教授 三 谷 英 夫

論文内容要旨

従来、下顎運動時における顎関節の疼痛や雑音及び開口障害等の臨床症状を訴える顎関節機能障害の診断は、主に臨床症状に基づいて進められていたために、そのなかには病因や病態の異なる各種の顎関節障害が含まれており、その診断基準及び他の疾患との鑑別などに不明確な点が少なくなく、これらの患者に対する適正な診断が近年、重要視されている。

本研究では顎関節機能障害を訴える患者の X 線の診断基準を得るため、20歳代の東北大学歯学部学生 225 名（男性 196 名、女性 29 名）を対象 1（青年群）とし、東北大学歯学部口腔診断科を受診し比較的軽度の顎関節機能障害と診断され、臨床症状の発現から来院までの期間が 6 カ月以内で、欠損歯や補綴歯の少ない 10 歳代から 60 歳代の 341 名の患者を対象 2（患者群）とした。これらの対象者について、著者らが開発した顎関節動態規格 X 線撮影装置を用いて側方顎関節規格 X 線写真を撮影し、顎関節の骨の形態的異常の頻度を調査した。その後、対象 1、対象 2 の顎関節に形態的異常のみられない者について、下顎頭前後の顎関節腔の面積を定量的に計測して左右側の顎頭位を求め、二次元座標上にプロットして検討し、更に、対象 1 では臨床症状と顎頭位の関係や不正咬合と顎頭位の関係について検討を行った。また対象 2 で顎関節機能障害と診断され、顎関節の骨に形態的異常のみられない患者について歯科治療（主に咬合治療）を行って臨床症状が消退した後、3 カ月から 4 カ月経過して経過観察のため来院した患者 45 名を対象 3（治療者群）とし、初診時と臨床症状消退後の顎頭位について比較検討を行った。

その結果、対象 1 において臨床症状と不正咬合がみられない者の左右側の顎頭位は第一象限の 0 から 0.5 の範囲に約 90% みられ、前後及び左右の偏位が少なかった。対象 2 において骨の形態的異常が無く、片側に雑音、疼痛及び雑音と疼痛を認めた症例は 31 例、56 例、65 例で、それらの左右側の顎頭位は第一象限以外の象限にそれぞれ 22 例（71%）、31 例（55%）、43 例（66%）みられ、前後及び左右の偏位がみられた。対象 3 において左右側の初診時の顎頭位は第一象限に 18 例（45%）であったのに対して、臨床症状消退後の左右側の顎頭位は第一象限に 33 例（73%）と増加した。

以上より、顎関節機能障害を訴える患者で骨形態的異常のみられない者に対し、面積による顎頭位を求め、左右側の顎関節を一对として分析した結果、本疾患に対する X 線の診断基準の一つとして役立つことが確認された。

審 査 結 果 要 旨

顎口腔系の機能は咀嚼系の構成要素である顎関節と上下顎の歯や咀嚼筋及びそれらを統括する神経系が一体となり、総合的かつ機能的に協調することによって営まれている。しかしこれらの不調和によって発症する顎関節機能障害の診断は必ずしも容易でなく、現在行なわれている検査も十分とは言い難い。X線検査は顎関節の形態的变化を知るための不可欠の検査として使用されているもののX線写真を用いて顎関節の形態と機能の関係を究明した報告は少なく、また歯科治療後の顎関節の変化についての研究は殆どなされていない。

本研究は著者らが開発した顎関節動態規格X線撮影装置を用いて、歯学部学生、比較的軽度の顎関節機能障害患者及び歯科治療によって症状の消退した患者について各々の顎頭位を定量的に測定し、顎関節機能障害のX線診断基準を得ることを目的として、その基礎的研究を行ったものである。

方法は側方顎関節規格X線写真について顎関節の骨形態の異常を調べたのち、下顎頭前後の面積を定量的に計測して左右側の顎頭位を求め、二次元座標上にプロットし顎頭位と臨床症状や不正咬合との関係を比較検討している。

本研究によって得られた結果は下記の通りである。

①歯学部学生で臨床症状がみられた者の左右側の顎頭位は前後及び左右の偏位がみられ広範囲に分散したが、臨床症状と不正咬合のみられない者の左右側の顎頭位は第一象限の0～0.5の範囲に約90%みられ偏位も少なかった。

②比較的軽度の顎関節機能障害患者で顎関節の形態的異常がなく片側に臨床症状のみられる者の左右側の顎頭位は第一象限以外の象限に半数以上みられ、偏位も認められた。また両側に臨床症状のみられた者の顎頭位は片側の場合より顎頭位が散在し偏位も大きかった。

③歯科治療によって症状の消退した患者の第一象限における顎頭位は、初診時の45%から臨床症状消退後73%に増加し、初診時に雑音または疼痛のみ認められた者の顎頭位の多くは症状消退後に0～0.5の範囲にみられた。

以上の研究の結果は、従来の顎関節機能障害X線診断において試みられなかった顎頭位の位置変化を定量的に明確にしたばかりでなく、今後の顎関節機能障害の診断と治療に役立つものと高く評価できる。したがって本研究は歯学の発展に寄与するところ大であり歯学博士の学位授与に値するものと判断される。